

偏在解消へ 大学病院が支援

①

薬剤師のマンパワー不足で業務の遂行に難渋している地域の病院は少なくない。金沢大学病院薬剤部のような『常駐型』支援ではなく、定期的な薬剤師が出向いて地域の病院を支援しているのが大分、鳥取、鹿児島、各大学病院の薬剤部だ(④は21日付8ページに掲載)

地域4病院の支援開始

大分大学病院薬剤部は、2015年8月から地域の病院支援を開始した。現在支援しているのは4病院。5人の薬剤師が交替しながら勤務時間外の土曜日に週1回出向き、現地で業務を担当。同院薬剤部長の伊東弘樹氏が平日に4病院をそれぞれ月1回程度回り、責任を持って支援している。各薬剤師は兼業として出向き、先方の病院から対価を受け取る。

伊東氏は「当院で働いていた旧知の医師が関連病院の院長になった。約140床の病院だが、薬剤師は1人しかいないため『手を貸してほしい』と依頼されたのがきっかけ。その後、他の病院の医師や看護師からも要請を受けて、支援先が広

がった」と語る。

支援先の病院で手がけるのは、診療の適正化や機能向上につながる支援だ。医療安全対策加算や感染防止対策加算を算定

できる体制の整備を指導

したり、院内回診に同行して薬物療法の適正化や多剤併用の解消を支援している。

「人手不足をただ解消

するために行くのではなく、大学病院の薬剤師として出向く価値がある支援を心がけている」と伊東氏。

大学病院の取り組みに基づき、調剤以外の業務発展や拡充を支援し、現地の薬剤部のレベルアップを支える。

大学病院側にとって、地域医療の実態を知ること、視野が広がり、現状に応じた連携に取り組むことができるという

う。「行ってみて初めて困っていることやニーズが分かる。勉強になることが多い」

4病院の他にも、地域の病院から支援の要請が来ている。伊東氏は「地域の病院を支えなければいけないと認識している。一定以上の能力を持つ薬剤師しか出すことはできないので、支援するにしても限界はあるが、可能な範囲で支援先を増やしたい」と語る。